

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370944

研究課題名(和文) タイ北部、ユーミエンの新たな宗教現象と民俗知識の再編に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the New Religious Movement and the Reconstruction of Folk Knowledge of the Lu Mien of Northern Thailand.

研究代表者

吉野 晃 (YOSHINO, Akira)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60230786

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：タイのユーミエンのもとで生じている新たな宗教現象は、(1)固定的祭祀施設＝廟の建設、(2)シャマンあるいはシャマン祭司としての女性祭祀者の登場、(3)歌唱による儀礼執行という3つの特徴がある。これらはタイのミエンには無かった現象である。それは従来の儀礼知識と歌謡知識とを再編し応用して新たな儀礼を作り上げたものであった。この新宗教現象は、従来の儀礼に対して相補的な形で展開されている。

研究成果の概要(英文)：A new religious phenomenon occurred in the Lu Mien society of northern Thailand. It has features as follows: 1) The construction of permanent shrines. 2) Female shamans conducting rituals. 3) Conducting rituals by songs. There were no such features in traditional rituals. They constructed new religious rituals by restructuring traditional ritual knowledge and knowledge of songs. Its activities were developed as complements of the traditional rituals.

研究分野：社会人類学

キーワード：ユーミエン 新宗教現象 女性シャマン 女性の儀礼参入 歌 相補的展開 民俗知識の再編 廟

1. 研究開始当初の背景

本研究の前にはミエンの文化復興運動の調査研究を行ってきた。その文化復興運動の実践には、漢字教習や伝統文化セミナーなどの「教習型」実践と、スポーツ文化祭や音楽祭などの「イベント型」実践との二つの類型があった。「教習型」の実践は2000年代を最盛期として2010年代に入ると衰え、一方、「イベント型」の実践は、2010年代に入って盛んになりつつあった。その「イベント型」に類する現象で、2010年代以降顕著になってきたのが、従来にない特徴を持つ新しい宗教現象である。新たな宗教現象(以下、新宗教現象)は、(1)固定的祭祀施設＝廟の建設、(2)シャマンあるいはシャマン祭司としての女性祭祀者の登場、(3)歌唱による儀礼執行という3つの特徴をもつ。(1)も従来になかった現象であるが、特に(2)女性祭祀者の登場と(3)歌唱による儀礼執行は、タイ北部のミエンの儀礼には見られなかった全く新しい現象であった。この点で、文化復興運動の新たな局面であるとともに、民俗知識の再編の新たな展開であった。

2. 研究の目的

(1) 新宗教現象の儀礼プロセスの詳細な記録と分析に基づいて、既存の儀礼知識が再編されて新たな儀礼を創り上げたメカニズムを明らかにし、女性祭祀者がジェンダーの境界を越えて儀礼に参加するようになった要因を解明する。(2) 歌唱による儀礼執行は、単なる儀礼知識の再編にとどまらず、歌唱知識の再編でもある。そのために歌唱文化そのものを調査して歌唱を成り立たせている言語的諸規則を明らかにし、歌唱知識が儀礼知識とどのように接合されてきたかを解明する。(3) 以上の作業を通じて、儀礼知識の再編を、「教習型」文化復興運動も含むユーミエンの民俗知識の再編の大枠の中に位置づける。これによって、新宗教現象が生じた要因を明らかにするとともに、国民化・グローバル化が進行する中におけるマイノリティの抵抗実践としての側面を明らかにする。

3. 研究の方法

主としてインタビュー調査による。その対象は A. 女性シャマンなど新宗教現象に関わっている人々、B. 新宗教現象に直接関わっていない他村一般のユーミエンの人々、C. 祭司など儀礼に関する民俗知識を集約的に伝承している人々、D. 文化復興運動を中心的に担っている人々である。A のインフォマントには、新宗教現象に関する情報を聴取する。B のインフォマントには、新宗教現象と文化復興運動に対する反応、民俗知識のあり方について聴取した。C のインフォマントには、儀礼に関する民俗知識の伝承形態とその内容について聴取した。D のインフォマントには文化復興運動の組織的側面について聴取した。さらには、E. 新宗教現象の儀礼の記録・

参与観察および F. ユーミエンが主催しているイベントの記録・参与観察を行った。これらのデータを分析し、民俗知識の大きな変化の流れの中に新宗教現象と文化復興運動を位置づけた。

4. 研究成果

廟の建設と建て替え タイのミエン社会における最初の廟の建設は、2000年にチエンラーイ県の HCL 村であった。この廟において、女性のシャマンが出現した。その影響は同じチエンラーイ県の HCP 村におよび、2004年に「ユーミエン文化センター」の名目で実質的な廟が建設された。その後2009年陰暦八月十五日に最初の降神があり、女性1名と男性2名に盤王が降神し託宣した。2010年に主祭神の盤王の像を設置した。2012年陰暦正月に隣にあった集会所に神像を移して、そこを第二の廟とし、2012年陰暦三月に旧廟を取り壊した。更にその跡地に新しい第三の廟を建設し、2015年に開廟した。廟は建て替える度に規模が大きくなっている。

廟における儀礼 HCP 村の廟における女性シャマンが執行する儀礼は、陰暦毎月初一日と十五日に開かれ、正月初一日～三日と七月十四日・十五日には大規模な儀礼が行われる。この正月と七月の儀礼を毎年観察・記録した。廟においては女性シャマンが降神して、歌を唱って神を祀り儀礼を執行する。それを毎回録画記録した。全般的に儀礼の次第等が固定化しておらず変化が大きいことと、在来儀礼の要素を新たに取り込んでいることが明らかになった。第一廟、第二廟の時には、女性シャマンがクライアントの求めに応じて治療儀礼や占い、託宣を盛んに行っていた。第三廟になってからは、女性シャマンが個人的な相談に応じて儀礼を行うことが少なくなり、リーダーの男性祭司が行う儀礼の補助と、女性シャマンの集団儀礼が増加した。このように、廟における女性シャマンの儀礼の内容が変化してきている。これは、個人的な儀礼を避け、女性シャマンの集団の統合が強くなってきたと看取される。一方で一般信者の参拝が減少し、廟の活動に変化が見られた。

女性シャマンの活動の展開 HCP 村の女性シャマンが村外で個別の要請に応じて行っている治療儀礼の観察記録も行った。女性シャマンの活動範囲が HCP 村内にとどまらず、タイ北部のユーミエン村落のかなり広い範囲にわたっており、女性の儀礼参加が広く受け入れられていることを明らかにした。

女性シャマンの経歴 二十数名の女性シャマン各個人の経歴・成巫過程・師弟関係等を聞き取った。これらによって、女性たちがシャマンになった動機等の情報を収集した。女性シャマンが初めて降神したのは、五十歳代以降になってからという事例が多く、高齢での降神体験という特徴がある。

女性シャマンたちの組織 廟の女性シャマンたちの大半は、リーダーの盤 ZF という男性

祭司を「師父」とし、劉 MK という女性シャマンを「師母」として、この二人と師弟関係を結んでいた。少数の者が劉 MK 以外の女性シャマンを「師母」としていたが、それらの師母も劉 MK の弟子であり、大枠では全女性シャマンは盤 ZF と劉 MK に収斂する二系列の師弟関係によって統合されていたのである。歌謡語の調査 ナーン県 NG 村とパヤオ県 PY 村において、歌詞の採録と詠唱法に関する聞き取り調査を行った。ユーミエンの歌には口語とは異なる語彙による「歌謡語」が用いられる。漢字で書かれた歌詞を採録し、その一字ごとの発音を記録した。これにより、歌謡語の解明を進めた。また、既存の歌詞がない即興歌の録音と発音確定、意味の聴取も遂行した。これらにより、詠唱法の詳細が明らかになり、さらに歌詞に見られる歌謡言語の採集がすすんだ。

詠唱法 詠唱法も 4 種類あり、用法が複雑であるが、歌に詳しい祭司とともに儀礼の映像ビデオを観察して、儀礼で用いられている詠唱法が 4 種の詠唱法の中の 1 つのコン・ツウンという詠唱法であることを特定した。

「ユーミエンの音楽祭」毎年 4 月にチエンセーン市で開催されており、2015 年にその観察記録を行った。この音楽祭はユーミエンの自発的な歌謡イベントとして維持されている。いずれにしても、ユーミエンの全国組織が直接関わらない個別発生的な運動である。この音楽祭においては伝統的な歌謡と現代的な楽曲がともに演じられている。その組織や準備についても詳細な聞き取りを行い、歌謡をめぐるユーミエンの動向を把握した。

表 1 従来の儀礼と HCP の廟の儀礼

儀礼執行者	従来(廟)における儀礼	HCP の(廟)における儀礼
男性祭司	女性シャマン(圧倒的多数)	女性シャマン(圧倒的多数)
神	しない	男性祭司(隣神として司祭)する
儀礼執行者の類型	Priest(祭司)	Shaman(シャマン)
唱え言	経文の誦読 漢字知識が必要	Shaman-priest(シャマン祭司) 歌(経文なし) 漢字知識は必ずしも必要なし
言語	Tsio waa 儀礼語(広東語) Khe? waa 漢語雲南方言 Mian waa ミエン口語	Dzan nei waa 歌謡語(文語) Mian waa ミエン口語
祭神	〈大堂廟〉の神々(道教・法教) 〈玉帝〉 道教・法教系経文に登場する神々 祖先 師父	老君 師老 伏羲姊妹 七姐 太白先生 劉三姊妹 口承伝承とマイナーな経文における神々(主要経文には登場しない)
	盤王・唐王(経文あり。像なし)	盤王・唐王(像あり)

相補的展開 こうした新宗教現象は、既存の儀礼と対抗するものではなく、既存の儀礼とは共存する形で展開されてきた。従来の儀礼で祭司の後継者難により担えなくなってきた小儀礼(厄除け、強化儀礼、祓除儀礼等)を担当している。これは、従来の儀礼に取って代わるものではない。儀礼執行に歌唱という新たな方法を導入し、神が降り儀礼を執行する方法を導入したことで、従来のように経文を誦読することが必要なくなった。これにより、女性の儀礼執行への参入が可能となった。また、祭神も、従来の道教・法教儀礼では対象としてこなかった神々を祭神とし、可視化した。すなわち、儀礼の執行方法と祭神の両方において、従来の儀礼のニッチを埋める形で展開されてきたのである(表 1 参照)。

民俗知識の再編 新宗教現象では、既存の儀礼の形式や歌謡の技法を取り入れ、再編して応用している。従来無かった「師母」という役割を創出したのもそうした儀礼知識の再編である。また、従来の儀礼では祭司対象となっていなかった口承伝承による神々を主祭神として儀礼を組み立てているのも民俗知識の再編である。全体として儀礼知識の伝承者が減少し、ミエン文化の危機が危惧される中で、こうした民俗知識を再編した適応が生じたと言える。

研究成果の意義 このようなミエンの新宗教現象が新しいため、これに着目し調査研究している研究者は筆者のみであり、また、ミエンの歌謡について研究している研究者も極めて少ないため、ミエンの文化変容を研究する上で大きな役割を果たしている。

今後の展開 今後は、歌謡の調査を進め、歌謡語語彙の收拾を図るとともに、その語彙収集の成果を活かして、儀礼における女性シャマンの託宣等の歌の内容分析を展開して行きたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(3) 『過山榜圖』発音と注釈」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』69, pp.73-84, 2018. 査読無, オープンアクセス有。 <http://hdl.handle.net/2309/148754>

(2) 吉野晃, 「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(2) 『後生娘子歌』発音と注釈」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』68, pp.47-58, 2017. 査読無, オープンアクセス有。 <http://hdl.handle.net/2309/146897>

(3) 吉野晃, 「歌の詠唱法と儀礼への応用 タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に関する調査の中間報告 2」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』67, pp.105-112, 2016. 査読無, オープンアクセス有。 <http://hdl.handle.net/2309/140117>

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 吉野晃「相補展開 タイ北部ミエン(ヤオ)における新しい宗教現象の伝承的基盤」日本道教学会第 68 回大会, 2017.

(2) 吉野晃「タイ北部におけるミエン(ヤオ)の歌謡と歌謡言語と儀礼」日本タイ学会第 19 回研究大会, 2017.

(3) 吉野晃「廟における女性シャマンの儀礼と組織の変化 タイ北部ミエン(ヤオ)社会における新たな宗教現象に関する中間報告 4」日本文化人類学会第 51 回研究大会,

2017.

(4)吉野晃「タイ北部におけるミエンの歌謡と儀礼の新たな形態について」国際シンポジウム“瑶族の歌謡と儀礼”，2015.

(5)吉野晃「歌の詠唱法と儀礼への応用
タイ北部、ユーミエン(ヤオ)社会における新たな宗教現象に関する中間報告3」日本文化人類学会第49回研究大会，2015.

〔図書〕(計4件)

(1)塚田誠之(編)・河合洋尚(編)・須藤健一・韓敏・松本ますみ・兼重努・長谷川清・廖国一・高山陽子・松岡正子・長谷千代子・稲村務・権香淑・藤井真湖・上野稔弘・横山広子・蔡志祥・曾士才・楊海英・吉野晃『中国における歴史の資源化の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告142)国立民族学博物館，2017，327pp.(pp.309-322).

(2)廣田律子(編)・吉野晃・吉川雅之・丸山宏・浅野春二・内海涼子・譚静・三村宜敬『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』大学教育出版，2017，347pp.(pp.55-71).

(3)長谷川清(編)・林行夫(編)・藤本晃・村上忠良・小林知・飯國有佳子・小島敬裕・片岡樹・黄蘊・兼重努・吉野晃・志賀市子・小西賢吾『積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究 東アジア・大陸東南アジア地域を対象として』(CIAS Discussion Paper No.46)京都大学地域研究統合情報センター，2015，131pp.(pp.97-103).

(4)野村伸一・星野紘・田耕旭・皆川厚一・吉野晃・陶思炎・余達喜・廣田律子・鈴木正崇・謝聰輝・李京燁・李徳雨・小川直之・笹原亮二・西郷由布子・内藤久義・三村宜敬『アジア祭祀芸能の比較研究』(国際常民文化研究叢書第7巻)神奈川大学国際常民文化研究機構，2014，424pp.(pp.141-155).

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉野 晃 (YOSHINO Akira)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：60230786